近世文人の書簡

水　田　紀　久

【第一部】

昭和42年から本学のお手伝いにあがっております、水田紀久でございます。今日は一時から五時までなんですけど、パート１、パート２、パート３。パート１はまずここに持参致しました、昨年暮れに新聞・テレビを賑わしました芭蕉の自筆の草稿本の話をちょっとさせて頂いて、そして江戸時代の文人の書簡についてという、そして休憩を致しまして最後に今お手元のプリントの離縁状と三行半、それから西鶴の書簡体小説『万の文反古』のなかのお話。これは候文で書いております。それで、書簡文体で創られました創作のお話を読んで終わろうかと思っています。よろしくお付き合いの程お願い致します。

それでは始めます。十一月のことでございました。大阪に中尾松泉堂という本屋があるんです。今の社長、この中尾堅一郎氏が十五年前ほどに何かとものを交換したかたちで手に入れておったのが原本なんですね。その中尾さん、十数年前に手に入れて、果たして本物なりや否やと。持ってる者が一番居心地が悪いわけですね。偽なら偽ではっきりしますし。それでその道の権威に、芭蕉の筆跡の権威に何人かお見せして鑑定を乞うたわけです。まあ、今は亡き伊丹の岡田利兵衛先生は見られたかどうか。その岡田先生には『芭蕉の筆蹟』という芭蕉の筆跡の大著があるんです。だから芭蕉の字というと岡田先生ということになっているんです。伊丹の柿衛文庫ですね。柿衛文庫っていうのは、郷土資料、芭蕉・蕪村という俳諧の短冊・書簡そういったもののコレクションでは日本で有数、指折りです。ここの岡田先生が『芭蕉の筆蹟』という本を出された。もう一字一字ね、“し”なら“し”で芭蕉の何期かに分けるんですよ。四期か五期かにね。今度も、これも上野洋三氏が芭蕉の書きくせ、筆癖を押さえて、芭蕉の自筆だろうという、非常に説得力に富んだ解説があるんでございますけ

れども。話を戻しますが、中尾さんが柿衛先生に真贋を乞われたかどうか分かりませんが、まず天理図書館、だいたい日本は社会教育なんてのはもう冷遇で、博物館学芸員だとか図書館の司書とか言うとですね、教員よりだいぶ低いと見られますが、あそこは司書研究員という制度を創られて、ライブラリアンでもプロフェッサーと同じ待遇をしたんです。だから天理図書館の司書研究員というのは実力は大学教授よりもずっと…。本物を常時見ているんですからね。羨ましい限りです。そういうことで、ずっと座ってられた木村三四吾先生やらに見せた。ところが弱い、細い、字が。それで、所蔵者中尾さんもなんかこう、気持ち悪い状態で外に出すのを憚っておったんです。で、数年前に中尾さんの目録、つまり通信販売のカタログ、それにテーマがあるんです。連歌と俳諧かなにかのテーマの時に、この原本を多少拡大して古書目録の表紙に使ったんですね。そうするとまあ、専門家からはああやっぱり本物と違うかという問い合わせがずいぶん来たんだそうです。そうこうしているうちに、一昨年の地震でございます。阪神・淡路大震災。で、中尾さんのご自宅の下には活断層が通っておりまして、これで半壊したんです。その時、箪笥の引き出しを入れてたっていうんですな、原本を。それでやっと探し出して、まだ大谷篤蔵先生が御在世の頃、一度お見せしたそうで。先生の手、震えてたそうです。先生は岩波の『芭蕉全図譜』を監修されたんですね。もしもこれが本物と分かっておれば、当然これに入れるべきだったんですが、時期的にもずれましてこれには入らなかったんです。そのまま先生、去年の夏にお亡くなりになりまして、あと神戸親和女子大学の桜井武次郎教授と、大阪女子大学の上野洋三教授とがもっぱら専門家としてこれを研究されまして、そうしてこの中尾松泉堂創業八十年記念ということで、十一月に発表しました。で、もっぱらこの七十四箇所にわたって芭蕉が推敲すべくはり紙して、写真は技術的に、ＮＨＫの大阪支局でやって、それで今度はこれを百二十部だけ特製を作って、越前和紙をわざわざ漉かして、原本の紙にいちばん近いように、それから紙の質は京都工芸繊維大学名誉教授、町田博士が鑑定されましてね、あらゆるそういう科学的な面からも押さえて。上野さんの方法は、例えば「船の上に生涯を浮かべ…」涯でも、芭蕉の書く字は一本いらない線を書いている。そういう癖がいくつかあるんです。生死の死もそうです。そういうことを押さえて、これは芭蕉でないとこういう間違いはせんという、ネガティヴな方法で実証、芭蕉自筆なることを、実証されたんで

すね。で、これは芭蕉の筆癖全部を頭に入れんならん。上野洋三教授はこの『芭蕉全図譜』を改めて三遍見なおしたそうです。だけど、同じ現物どおり複製するなら、一枚包み紙がございましたんですわ、それに伝来がわかるんですね。なんでしなかったんか。まあ、今度は岩波からこの一月二十四日に、並製というか普及版といいうのが出ます。これは岩波に三万以上予約が来てるという。日本人がいかに事大主義の民族か分かりますね。毎日新聞でしたかね、坪内稔典という評論家が朝刊で、あんなに新出本『奥の細道』に騒ぐほどではないんだと。何故ならこれはあくまで推敲、芭蕉の草稿本でしょう？　自分が、推敲の段階が如実にトレース出来るだけのことですから。そりゃ作者の筆には違いないですけどね、99.9%までは。今まで我々が『細道』をやるときのテキストは、柏木素龍という人の書いた素龍本、柏木素龍は上代様の書家でございましてね、プロなんですね。芭蕉は字は素人なんですね。字書きじゃないんですから。だから芭蕉は、句調わずんば舌頭に千転すべしと言って、自分の得心のいくまで直した原稿をきれいに清書したのを素龍に渡して書かせて、それを自分が持って旅をしたんですね。綴本の真ん中の題箋だけは芭蕉自身が、『おくのほそ道』自ら筆をとって書いて貼って、それを旅に持っていったんですね。で、柏木素龍は清書して、もう一度それを清書しなおして、だから現在、素龍の書いた『奥の細道』が二点残ってるんですね。で、ひとつは福井県敦賀市の西村さんという、昔から西村本と言いますね。福井県の文化財に指定され、今はもう国の重文になっております。それからもう一点は、素龍の書いた『奥の細道』は、岡田利兵衛先生の柿衛文庫なんです。で、これは先程申しましたように、芭蕉が納得いくまで、作者自身『奥の細道』という紀行文、作者自身、松尾芭蕉が得心のいくかたちをプロの書家に書かせたんですから。我々文芸愛好の徒は、やっぱりそれで味わうべきなのですよ。だから、坪内教授が仰有るのがもっともです。そんなに言うほどのことでもない。だからこれが、この出現によって少しも、素龍本の価値が下ることはないんです。僕は真贋どっちとも言いませんけども、桜井氏なり上野さんは信頼できる人ですので。それでね、この解説を初め中尾さんは中村幸彦先生にお願いしたんですよ。近世文学の大家ですね。中村先生は俳諧の専門家じゃないからと、上手にお逃げになった。何故なら中村先生もまた若かりし日に天理図書館司書研究員で、天理学派ですからね。その旧同僚たちが沈黙している本に解説を書くのはいかにも義理悪いでしょう。

だからお断わりになった。しょうがない、中尾氏は筑波大学の名誉教授の尾形仂氏にお願いした。だから尾形さんの序文がまずあって、で、あとは桜井武次郎教授の複製本刊行にあたってという文と、翻刻と推敲の違い。で、その次に上野洋三氏が芭蕉の書きぐせを書いてるんですね。さあ順に回してご覧になって下さい。僕の愛蔵書を、後輩の手垢で汚れたら嬉しいんです。どうぞご遠慮なく。そういうことで、第一部は終らせて頂きます。

【第二部】

二限へ参りましょう。皆さん、『徒然草』の三十一段でしたかね。こういう話があるんです。ある人のもとへ伝えなければならない所用があって、手紙を書こうとした。その時に用事だけ書いた手紙を遣って、表に広がる雪景色のことは一言も触れなかった。見事に兼好、一本取られるんです。向こうから返事が来ます。返事には用事もさりながら今朝の雪の眺めはどうですかと一言も、兼好君、君から来た手紙には書いてないとね。そんな無風流な人間の仰有るようなこと、聞き入るべきかってね。で、その結びが面白い。もうその相手って言うのは古人だから、些細な事でもなんか思い出に残っていると。本来手紙というのは一方通行ではなく、お返しというか、それにむくいる返事が返ると。これが手紙の本来のスタイルなんですね。それからご存じのように、プライバシーの問題があります。それがあるから面白いとも言えるんですね。

そういうわけで私も前々から手紙には興味を持っておったわけですが、もう三十年程前に先輩・後輩・諸先生方にご協力頂き、大修館書店から『中国文化叢書』というのを出しました。その第九巻めが日本漢学というテーマの一冊。そのなかの大谷篤蔵先生が書かれた「手紙文の持つ面白さ」という話だけをちょっと読んでみます。漢学者の手紙のなかでも、数も多く資料として役立ち、我々が読んで興味が持てるのは普通の世俗一般のね、ジャパニーズキャラクターで書いたものであると。そういったものは自由に思うところを表現しえていて十分に我々読者を満足させてくれる。元来書簡なるものは実用の文であって、文芸作品ではない。その型をかりて美的に創造していけば、書簡体文学が出来るわけですね。でも本来は実用的なものです。文芸作ではない。実用を弁ずる

のが主眼であって、筆者の予想する読者は受信人に限られており、不特定多数、最大読者を予定してなかったんですね。それだけにプライバシーに関わることになるわけですけど。どのように表現しようかと、そういうレトリカルなことに心を砕きません。たとえばここに頼山陽書簡集があると。ここに収集されたものは刊行されて多くの人の目に触れることを予想したわけではない。だから相手以外に読まないことを前提にして書くのはそれは一番純度が高いわけだと僕は思うんです。したがってそれ故にこそ、我々はそこに赤裸々な山陽その人の躍動するのを見ることが出来る。また当時一般の書簡の文体であった候文というのは、しめくくりは丁寧語あるいは謙譲かなんかで押さえるわけで、あとはもう自由自在でね。候文というのは一般に文章体が口語体になった現代から考えると、いかにも窮屈至極な文体のように思えるけれども、実は非常に自在なもので〈御座候〉とか〈存奉候〉とか、〈可被下候〉などと決まり切った言葉を前後につけるとう形式さえ守れば、中味は漢語・口語・俗語・外来語、何を入れても差し支えはない。そのくせ口語体の如く冗長ではない。歯切れがよいという誠に自由な文体である。この自由な文体で書かれた書簡においてこそ、我々は筆者その人の人間を読み取ることが出来るのであると。で次、候文解読の方法。一般に書簡は他の真跡類、色紙や半折などに比べれば読みがたい。先程挙げたような書簡特有の常套語などは甚だしい省略体で記号のように書かれる場合がある。また微細な筆のひねりよう、筆勢でどちらにも決めかねるものが非常に多い。その他は書簡以外のものと比べて特に違ったこともないので、要は草体、草書体の字体に習熟し、読み慣れることに尽きる。殊に漢学者の場合には自己流のくずし方が少なく、割合きちっとルールにかなってるんです。ですから、一見したところ非常に読みにくいようでも一字一字なんとか綿密に見ていけば、読みの下らないことはない。こう仰有っています。こうしたことを頭に入れて、次に雨森芳洲の手紙を、実際に皆さんで読んでみましょう。

芳洲は木下順庵の門下、木門で、新井白石とは同門です。対馬藩に仕え朝鮮語・中国語に通じた、語学の天才であります。これは西陲の任地から幕府儒官として幕政に参与する白石に送った文で、芳洲三十七才の時に書かれたもの。候文のうち漢文を交えた、気持ちがのびのび表されている名文です。今日お配りしたこの資料は、『名家手簡』というものです。これ実は版木で刷ってあるんですよ。こういう技巧を双鉤塡墨と言います。双鉤っていうのは本来筆の持ち

方のことですけども、この場合字の外側だけずっと囲むんですわ。これを双鉤と言うんです。字の外側を先にかこって輪郭だけつけておいて、中を後からぬる、これが塡墨です。で、この『名家手簡』という本は幕末に山内香雪が出したんです。この人は幕末三筆の一人市河米庵の弟子なんですね。手紙っていうのはね、書いた人の真跡、直筆じゃないといかんけれど、本人が書いたものでなくても、資料的価値があるわけです。だからかえって直筆じゃない手紙のほうが、クリティークは難しい。まったく根も葉もない絵空事を創ったのか、どの程度忠実度、信憑性があるのかを考えなければいけませんから、難しいわけなんですね。

実はこの手紙、大田南畝、蜀山人の随筆に『一話一言』というのがありまして、その巻三十五にこの芳洲が白石に宛てた手紙の全文が入ってまして、省略された部分というのがたくさんあるんです。何故省略されたかと言うと、成程この時代にこれはいかんな、とわかります。どういうことを編者の山内香雪が略したかと言いますと、資料二の三段め、これだけ略してあるわけです。九行目をご覧ください。「殊に世子の君御学術御精研に御座成され候段」、世子というのは徳川綱吉の養子になった後の家宣。六代将軍家宣が世子と呼ばれる間は五年か六年なんですね。そこでこの手紙が芳洲三十七才の時としぼれるんです。ここからしぼっていったんです。世子と呼ばれるのは宝永元年(1704)以後数年の間だけで、二段目、三段目が同じ時期に書かれたものとわかる。では『名家手簡』では何故省略してあるか。後から十五行目をご覧下さい。「三国の内にては日本ほど諸事不吟味成る事は、これ無き様に相見え申し候、あはれあはれ近年之内貴面を得、諸事御物語仕りたく存じ奉り候」、つまり日本と中国と朝鮮のなかでは日本がいちばん物を徹底して調べないと。こういうことがございますからね、そんなのを出すと、後々リスクを伴うでしょう、山内香雪が。これは芳洲の手紙だけじゃないんですよ。ここのひとつ前もね、新井白石の手紙、室鳩巣への手紙だったと思いますが、やっぱりカットしてますね。そこ見たら、政治批判。こんなものは公には到底出来ないだろうと。したがってこの部分は省略されているわけなんですね。だからこういう双鉤塡墨なんかの本を利用する場合にはね、こういうクリティークをないがしろにしないで、始めから疑うのもなんですけど、こういうこともあるので十分な検討が必要であるということなのです。

【第三部】

さてそういう候文というスタイルは、いろんなものにあります。ご覧になったら分かると思いますが、これは三行半、離縁状でございます。最初から読んでみましょう。「暇遣し申一札之事」です。「一、今度其元者不縁ニ相成候ニ付、暇遣し申處実正也」、正真正銘、亭主伊介がやすに宛てているわけですね。これを貰わないと再婚出来ないわけですね。自由になれない。「然ル上者、何方へ縁付致候共、一言之申分無御座候」、元の亭主として一言も言うことはありませんという意味です。「為後日一札如件」。安政二卯年ですね、九月。西暦1855年。これ本物のコピーです。国史辞典なんかにも、離縁状は出ている。若干文章は違うと思いますけど、だいたいこの型ですね。ちょうど三行と半分でしょ。この「三くだり半」でやすさんは自由になるわけですね。

さ、次はちょうど芳洲と同時代になりますけどね、井原西鶴の遺稿です。西鶴がはやりますと、死んでからも本屋が放っておきません。原稿集めたり、手を加えたりしてね。なんせ五種類も遺稿が出るんですから。元禄六年八月十日に西鶴は亡くなりますが、その年の暮れにひとつ遺稿が出ます。『織留』でしたかな。それから三年程おいて最後に『名残の友』が出ます。これは四番目です、書簡体の『文反古』っていうのはね。その四番目の遺稿集、『万の文反古』の巻二の第三話。「京にも思ふやう成事なし」という題ですね。この話の副題にはこういうのがついております。「此文に仙台に置きさりの女／頼み樽からに成身代」と。で、この手紙のシチュエイションはと言いますと、資料の№3をご覧下さい。そこの左に、「此文の子細を考見るに、生国仙台のもの、女を置きざりにして京へのぼり、たびたび女房をよび替、身代のさはりと成けると見えたり」。つまりこの手紙は、仙台出身の男が自分の妻をおいてけぼりにして都へ上って、それで都で何度も結婚して、結局身代を無くしてしまった。そういう人の手紙と思われる、とコメントをつけているわけです。それじゃ都へ上ってから何回ぐらい結婚しなおしているかと。それはですね、№2の後から三行目、「我等も十七年のうちに二十三人持替見申候に」、こういうところが西鶴ですね。半端でしょ、数が。普通は五とか十とかなのに。「皆おもひど御座候て」、皆満足いかないといって返した。ここで書いてあるのは六回程のケースが順番に書いてあります。そこで読んでみましょう。手紙体です。最初は紋切型の表

現です。そして、その後元気かい、と、今更言えた義理ではないけど故郷仙台が懐かしい。私、若気の至りで花の都に憧れ、親族やら友達の引き止めてくれるのも振り切って、仙台を立退き、二十年近くなってもやっぱり生まれ故郷のことは懐かしい。宛名は最上屋市右衛門様になってるでしょ。それで発信人は福嶋屋九平次という人。受ける方は仙台にいる友達。その友達に、君から別れた前の最初の女房に言ってやって欲しいというかたちになってますね。まだ未だに風の便りでは一人者らしいけども、再婚するなら一日も早くしろ、再婚出来るようにこの三行半を何度も送ってやっていると君から言ってほしいというかたちになっています。で、次に「無用の心中」とありますが、この心中とは義理、操立てです。もうこっちでは最初の妻をとうに忘れている、こんな薄情な男にどうして義理立てするのかと。いくら別れたと言っても、一旦は契りを結んだ女だから、不幸せを望んでいるわけではないと。それでなにが不満だったかというと、あんまり嫉妬が激しいから。それがいたたまれないで都へ出てきた。それから四条河原町に庶民相手の両替屋を出した。でっちと飯炊き女と、それから自分と。万事節約して、暮らしておった。たいてい駈け落ちしたような夫婦も共稼ぎなので、家計のために寺町の白粉屋の娘を貰った。これは前の女房とは大違い、遊びに言っても全然気にしない。おかしいなと思って見ているうちに、三行半下さいと向こうから望んだ。すると男の意地がありますね。だから憎たらしいから引き付けておくと、今度は仮病を使って暴れる。あるいは一挙手一投足浪費を尽くすので、一日でも早く手を切ったほうがいいと計算して、決着を着けた。その次、やっぱり年のいった人のほうが分別もあるだろうと、六角堂の宿屋の娘さんを貰った。年の頃は二十七というから、少しぐらいさばを読んでもせいぜい三十だろうと、思っていたけどこれが甘かった。予想以上に年くっていた。先方の家庭事情に詳しい人に年の頃を聞いてみると、娘さんの年が三十半ば越えてますって。これが十七の時の子。だからその年を足してみると、今年五十二か三かという。これはとんでもない。一旦嫌気がさすと何から何まで嫌になるもので、見ないふりしてじっと観察していたら、隠れて白髪を抜いている、その手元が堪忍出来ないといって、せっかく結婚にお金も使ったことなのに、三行半やったんです。今度は奥女中で世間知らず。見目形は問題ない、そのうえ心もやさしい。自分だけでなく他の人にも好評で、やっとのことでいい相手が三度目の正直で現れたわけです。所がそれがなんと

も桁違いな非常識。銭秤りがわからないのは致し方ないにせよ、世間知らずすぎる。それがなければ申し分なしですけど、これも別れてしまった。次はまたこっちから婿入りしたんですね。資産がある後家さんに。ところが世話になってる係累が多い。それだけですら煩わしいのに、なんと借金がある。一生かけても返済不能と、こっちから飛び出た。この後、古物商ですね、ふるがね屋の娘。持参金も、一応衣装も持ってると。この人が月に二三度乱気になるので、そのまま送り返した。たくさん女の人はいるけれど、うまい具合にいかんもんやなあと。少々蓄めてあるお金も、全部自分の結婚費用（笑）。費用の点然り、もう気持ちがその気にならない。それで竹田、ここは京都でも場末でね、傘貼り浪人じゃありませんけど、菅笠の骨を作って、ここまで零落し落ちぶれてもそれでも生きなければならない。業。人間というのはそういうもんなんです。おもしろおかしく書いていて、やっぱりここのところはしんみりね。ここに出てる浮き世なんてのはね、中世は当然無常感で、中世は憂き世ですね。近世は浮世草子とか浮世絵とか、憂いではなくて、この憂から浮に変わるのが中世から近世への移りですね。ここなんか両方です。現世を直視したのが浮世草子。それ以前の雑然とした仮名草子を一段と深め、高めたのが西鶴の浮世草子ですね。リチャードソンの『パミラ』は1770年ぐらいかな。西鶴はもう1600年代、半世紀程違いますね。『パミラ』という手紙体の文学は割合人情、風俗、リチャードソンをイギリスの西鶴と言うのはちょっとホラになりますけど。さて、西鶴がかなしという形容詞を使う時はね、感情の悲哀だけではなく、物質的な乏しさ、貧乏をかなしいっていうか、貧しいって言うんですね。かなしとかいてあったらね、そういうことです。色々あって、やっぱり最初の女がよかったという気持ちにならないのは、よっぽどあの女とは縁がなかったと。だから最上屋市右衛門君、これをよく彼女に言ってやって欲しい。花の都に憧れて上ったけれど、とどのつまりはこれやってね。都にいながらどこへ行くでもなく、美味しいものをたべるでなく、鳥羽に帰る車の音を聞いて、ようやく都と思うばかりであると。鳥羽は運送業の人達が住んでいたからね。市右衛門君、どうか私は死んだということで、どうしているかとかそういうことも言って欲しくない。出家剃髪して、廻国行脚することもあるでしょう。以上、二月二十五日、福嶋屋九平次、京より。とまあ、このようなお話です。

以上は、平成９年１月18日に行なった研究会の報告である。参加者は、並木治、村瀬順子、村井英雄、竹村はるみ、宗晴美、北城伸子、荒井とみよの７名。

議論になった問題点は次のとおりである。

・三行半と女性史
・樋口一葉『通俗書簡文』と『万の文反古』
・書簡の実用性と物語性
・書簡解釈の可能性～フィクションとドキュメント～

（文責荒井）